



東京芸術劇場マエストロシリーズ

トマーシュ・ネトピル&読売日本交響楽団

Tomáš Netopil & Yomiuri Nippon Symphony Orchestra



Tomáš Netopil

チェコ期待のマエストロ、 ネトピルの《巨人》

トマーシュ・ネトピルは、チェコの新しい世代を代表する指揮者の一人。ドイツのエッセン歌劇場及びエッセン・フィルの音楽総監督を務め、同じくチェコ出身の40歳代の指揮者であるヤクブ・フルシャとともにチェコ・フィルの首席客演指揮者のポストにある。

1975年、チェコ東部のブルジェロフの生まれ。クロメルジージュ音楽院でヴァイオリンと指揮を学び、ストックホルム王立音楽院でヨルマ・パヌラに師事。2002年、シヨルティ国際指揮者コンクールで第1位を獲得した。2010年、ドヴォ

ルザークの交響曲第7番を指揮して、ベルリン・フィルにデビュー。2019年には、読売日本交響楽団と初共演した。このときは、マーラーとほぼ同時代のチェコの作曲家スークの「アスラエル交響曲」を取り上げ、豊潤でロマンティックな演奏を披露した。

今回、「東京芸術劇場マエストロシリーズ」でネトピルは、マーラーの歌曲集『さすらう若人の歌』と交響曲第1番「巨人」を振る。マーラーもボヘミア出身であり、ネトピルにとって、マーラーの作品は特別なレパートリーのようなのだ。

ネトピルは、エッセン・フィルとマーラーの交響曲第6番と第9番の録音を残しているが、エッセン・フィルにとってもマーラーは縁の深い作曲家である。つまり、1906年の作曲家自身の指揮による交響曲第6番の世界初演はこのオーケストラを使って行われ、マーラーもその演奏に満足したという。上記の録音は、現代的なスピーディな演奏ではなく、ネトピルがマーラーの旋律をじっくりと歌わせている。ネトピルのマーラーへの共感が伝わって来る。

交響曲第1番「巨人」は、若きマーラーが書いた野心作。大地の冬からの目覚めを思わせる第1楽章ではカッコウの鳴き声が聞こえ、ほぼ同時期に書かれた歌曲集『さすらう若人の歌』から第2曲「朝の野辺を歩けば」の旋律をチェロが歌う。力強い民族舞曲風の第2楽章。コントラバスが奏でる民謡風の旋律で始まる第3楽章の中間部分でも『さすらう若人の歌』から第4曲「僕の恋人の青い瞳が」の旋律が引用される。そして波乱万丈の第4楽章は、トランペットのファンファーレに導かれて壮大なクライマックスが築かれる。

『さすらう若人の歌』で独唱を務めるのは、ヴィタリ・ユシュマノフ。サンクトペテルブルク生まれで、2015年から日本を拠点に活動を行っている。東京芸術劇場でも「ドン・ジョヴァンニ」（2019年）のタイトル・ロールや「フィガロの結婚」（2020年）のアルマヴィーヴァ伯爵を歌ったのが記憶に新しい。

マーラーの青春と早熟を感じさせる2つの作品で、ネトピルが、マーラーを得意とする読売日本交響楽団とともにどんな演奏を聴かせてくれるのか楽しみである。

文：山田治生（音楽評論家）



© 読響

11月20日④ 14:00開演 コンサートホール 詳細はP9へ

トマーシュ・ネトピル(指揮) ヴィタリ・ユシュマノフ*(バリトン)

読売日本交響楽団

曲目：マーラー／歌曲集『さすらう若人の歌』*、交響曲第1番 二長調「巨人」

トマーシュ・ネトピル 東京芸術劇場でのそのほかの公演

読売日本交響楽団 第252回 土曜・日曜マチネシリーズ

11月26日⑤・27日⑥ 各日14:00 開演



© Masaaki Hiraga